



古谷 浩一

風

北京から

若者に学ぶ 隣国への姿勢

上海に住む李淵博さん(27)には、忘れられない光景がある。

日本に留学中、青色の三菱コルトを中古で買い、瀬戸内海のしまなみ海道に行ったときのことだ。

「美しいなあ」。思わず言葉が漏れるほどだったという。島をつなぐ橋の上から見た山の緑や、その中に溶け込んだ家々の風景に感動したそうだ。

日本にいた7年間、李さんは愛車で各地を旅して回った。パンクで立ち往生したり、ガス欠で車を押ししたりしたこともあったが、「いやな思い出はない。楽しかった」。

何よりも心に染みしたのは、旅先で出会った日本人の人情の厚さだった。小豆島では、道を尋ねた屋台のおじさんが、「俺についてこい」。その場で屋台をたたみ、夫婦で島を案内してくれた。

「中国にいたときは分からなかった。日本や日本人のこと。中国の若者たちにも教えてあげたいと思った」

李さんは帰国後の今春、日本のことを伝える「在日本」という本を出した。

テーマは「コンピニ」「パチンコ」「妖怪」……。中国人留学生らが執筆し、主編は恩師である神戸国際大の毛丹青教授。ガイドブックでは物足りず、「より深く日本を知りたい」という人々を読者層に想定したそうだ。

「爆買い」の言葉とともに、日本に来る中国人が増えるにつれ、若者たちは中国政府のプロパガンダ像とは別の日本の姿に気づき始めているように見える。

翻って、我々日本人はどうか。

早稲田大3年の植野亜紀さん(21)は北京大に留学し、ブログで自らの中国生活を発信している。

幼い頃、親の仕事で米国と中国に暮らした。日本に帰国後、小学校の友だちの反応は、米国にいたと言えは、「かっこいい」。でも、中国帰りには、「まじか？」と否定的な言葉が返ってきた。

どうしてだろう。日本には、中国への何か差別感のようなものがあるのかな。もやもやとした疑問を覚えたという。

昨年からの北京留学では日々、「中国人の温かさ」を感じている。

小さなことだが、例えば、学生寮のルームメイトである中国人学生のおかあさんが来たときのことだ。授業から戻ると、ソファの上に洗濯された自分の服がたたんで置かれていた。「日本人だったら、勝手に洗濯しないな」と思いつつも、うれしかった。

言論NPOの世論調査では、中国の印象が「良くない」とする日本人は91.6%。印象の悪さを反映するように、中国を訪れる日本人は増えず、日本人留学生は減少している。

悪いのは、日本メディアの中国報道だと植野さんは言う。「直接ではないけど、言葉の節々に、中国を見下している感じがあると思う」からだ。

私自身は見下す気持ちはないけれど、同様の批判を多く聞くのも事実だ。

もっと深く隣国を知りたい。そして、いろんな中国を日本に伝えたい。2人の若者の話を聞いて、記者としての志を改めてかみしめる。

(中国総局長)